

8

チャリティー  
美術作品展

第43回

# 京都新聞チャリティー美術作品展

2025年12月17日(水)→22日(月) ●[特別展示]福祉のページ「わたしの作品」原画展  
午前10時～午後7時／京都高島屋S.C.(百貨店)7階グランドホール

## 2025年度「第43回 京都新聞チャリティー美術作品展」開催報告

2025年度は、「第43回 京都新聞チャリティー美術作品展」を2025年12月17日（水）から22日（月）までの6日間、京都高島屋S.C.（百貨店）7階グランドホールにて開催いたしました。

京都、滋賀を中心に全国の洋画家、日本画家、陶芸家、工芸家、彫刻家、書家、宗教家、文化人ら801人の皆さまからご賛同をいただき、福祉への思いのこもった937点の作品をご寄贈いただきました。

期間中の来場者数は4,853人にのぼり、入札件数は2,922票に達するなど、多くの方々にご来場・ご協力をいただきました。

本展の寄付収入（落札金）は、「京都新聞愛の奨学金」事業をはじめ、障害のある方々や高齢者、子どもたちへの助成・贈呈事業、福祉団体への支援を行う「福祉活動支援事業」、さらには地域福祉の向上に貢献された個人・団体を顕彰する「京都新聞福祉賞・福祉奨励賞」褒章事業など、当事業団が展開するさまざまな福祉活動の貴重な財源として活用させていただいております。

ご協力くださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。



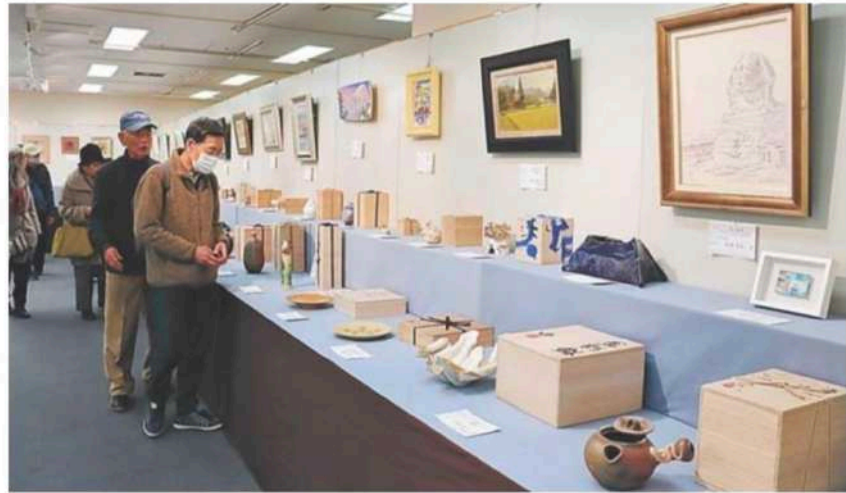
(2025年12月18日付 京都新聞朝刊)

や宗教家、文化人から  
全国の著名な美術家  
ら寄贈を受けた作品を  
地域の福祉に役立てる

## 善意の美術品100点

チャリティー作品展始まる

下 京



福祉の充実を目的に著名な美術家らが寄せた作品が並ぶ会場  
(京都市下京区・京都高島屋)

「京都新聞チャリティー美術作品展」が17日、京都市下京区の京都高島屋で始まった。約800人から集まった約千点を展示し、購入者を募る。22日まで。

京都新聞社会福祉事業団と京都新聞が主催し、43回目。趣旨に賛同した重要無形文化財保持者や文化功労者、日本芸術院会員らが作品を寄せる。

会場は日本画家の千住博さん、陶芸家の神農巖さん、工芸家の村山明さんの作品をはじめ、漫画家のちばてつやさんのイラスト、俳優の吉永小百合さんらの色紙がずらりと並び、来場者らが見入っていた。

22日までの入札によ

って購入者を選ぶ方式  
れる。

で、収益は高齢者、子ども、障害者の支援や学生の奨学金に充てられる。  
午前10時～午後7時  
(最終日は午後4時まで)。  
無料。(天草愛理)

(2025年12月16日付 京都新聞朝刊)

# ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 京都新聞チャリティー美術作品展 ◆

「第43回京都新聞チャリティー美術作品展」が17日から19日まで、京都市下京区の京都高島屋S.C.（目黒店）7階クランドホールで開催される。京滋の地域福祉の充実に願って1983年から開いており、43回目の開催となる。

「キーン」の愛称で親しまれる木村英輝さんは、アクリル絵の具を素材に躍動的な筆づかいの作品を京都の寺や公共施設などに描いてきた。この美術作品展への出品は、2022年から5回目となる。

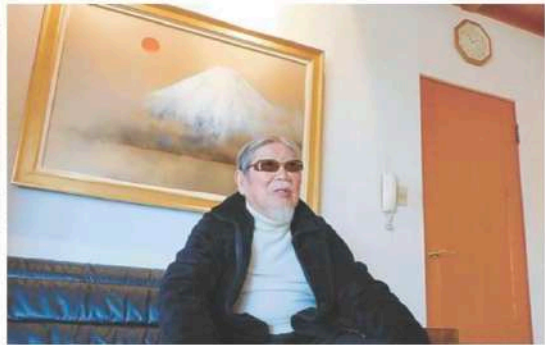
木村さんは京都市立美術大（現市立芸術大）でデザインを学んだ後、同大学の講師時代以降はロッククライブのプロデューサーとして、京都大西部講堂など伝説的なコンサートを手がけた。

木村さんが中京区の家具店が並

「究極のアマチュアリスムの原点を失わずにいたい」と語る木村英輝さん（京都市中京区）



富士を題材にした作品を背に画業を振り返る浜田泰介さん（大津市比叡平）



ぶ界わいに構えるスタジオの壁や天井は、「ロック画」ともたたえられる大胆な筆致でペインティングが施されている。「幼いころ道路いっばいに思い切り描くのが楽しかった。今でも大作に臨むと胸が躍る」と童心を失っていない。

ミュージシャンを引き立てる役割から、画業に専念するようになったのは6歳になってからだという。まず東山区の青蓮院で60面を手がけたのをはじめ、警察・消防署の壁に10年がかりで京の四神

玄武・朱雀・白虎・青龍の「神獣」を24年に完成させている。

作品のファンは国籍問わず幅広い。東山区にある外資系ホテルのフランス人管理職から依頼を受け、バックヤードの壁に描いているぞうだ。「永遠のアマチュアリズムという、プロデューサー時代から一貫して貴く原点の気持ちを失わずにいたい」と話した。

チャリティー美術作品展が始まった年から毎回作品を出品してきたのは、日本画家浜田泰介さんだ。

## 究極のアマチュア主義 社寺へ活動の場拡大

下京で17～22日

「ニューヨークでは、アーティストが競い合うように三つの財団へ作品を寄贈していた。前衛的な抽象表現でモダンアートを描いていた1960年代に渡米し、美術界が社会と深く関わっていた空気を体感している。

日本画に転向したのは帰国後だという。国内各地のデパートで巡回展を重ねた。

「真昼宗から依頼があったのは、大覚寺が最初だった」と回顧する。「嵯峨御所」の名で知られた門跡寺院へ92年に嵯峨湖の四季を描いたのははじめ、醍醐寺、東寺など真言宗の総大本山、さらには神社へと活動の場が広がっていく。

「大津百景」など風景画の連作シリーズを手がけ、大津市から文化特別賞を受ける。長年の題材として描き続けたのが富士山だ。2022年には「これまでの集大成」として石清水八幡宮（八幡市）の鎮座1150年の節目に「富士六景」を奉納した。

大津市比叡平に構える制作拠点の庭からは眼下に琵琶湖が広がっている。部屋には富士を描いた自作も飾られている。「京都にはよきにつけあしきにつけ新しいものが来る」。若き日の渡米経験から日本画の風景シリーズに至る画業の道のりを振り返った。

（秋元太一）

◆ 約1000点のチャリティー美術作品展への出展作品を希望する人は、入札を求めることができる。

## ◆第43回京都新聞チャリティー美術作品展「作品お渡し会」

2026年2月6日（金）・7日（土）両日に京都府立総合社会福祉会館ハートピア京都・大会議室（京都市中京区）にて、「第43回京都新聞チャリティー美術作品展」で落札いただいた作品を引き渡す「お渡し会」を開きました。

作品一点一点の点検後、丁寧に梱包して、落札者に作品の引き渡しを行いました。

